
神風 - K A M I K A Z E -

中村 呂美兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神風 - KAMIKAZE -

【Nコード】

N8344K

【作者名】

中村 呂美兎

【あらすじ】

え？僕が救世主？……何かの間違いじゃない？

毎日を平々凡々に過ごしていた望月^{もちづき} 虎鉄^{こてつ}は、高1の秋、全く見ず知らずの男から「ああ、救世主様！」と敬愛の眼差しを向けられる。全く身に覚えがないのに、だ。

その男は異世界から来たという。

「どうか私の国をお助け下さい、救世主様！」

問答無用に連れて行かれたそこは、虎鉄の住んでいた町とは全く異

なる世界だった……—。

序章（前書き）

初のお話なので、上手くいくかちよつと心配です；
でも頑張るんで、応援よろしくお願いします！

序章

——時は満ちた……。

薄暗い部屋だった。

相手の顔も、何も分からない状況下で青年は静かに口を開く。

「姫様、いよいよ満月にございます。いかが致しましょう？」

「参りましょう。私たちに残された道は、今やそれしかありません」

物音ひとつしないその部屋で、青年の声はよく響いた。また、姫様と呼ばれた少女の声も同様だ。

スツと、衣擦れの音が聞こえ、少女が立ち上がる。青年もそれに続いた。

「私たちの救世主を、お連れなさい。あなたに、この国の運命を託します。どうか、どうか救世主様を……。頼みましたよ、カース」
「必ずや、このカースが我らの救世主様を連れて戻って参ります。それまでどうかご無事で……。ナディア様……」

少女がフツと微笑む気配が伝わってきた。もしかしたら「もちろんです」と、暗に伝えたかっただけなのかも知れない。

しかし、青年——カースには、その微笑にちよつとした不安を感じた。もう二度と会えないんじゃないかという、意味もない不安感に

駆られたのだ。

「さあ、お行きなさい。私は大丈夫ですから、ね？」

「姫様……」

カースは不安を胸に抱きながらも、少女の言葉に従った。姫様――
ナディアの命令は絶対なのだ。

外に出ると、大きな赤い月が出ていた。今夜は満月だ。
カースは赤い月に照らし出された魔方陣の上に立つと、そっと目を閉じた。

その瞬間、ぐらりと体を揺さぶられるような浮遊感に見舞われた。
慣れていないものは、吐き気を催す者までいる。
カースは、そんな感覚の中ただ祈った。

ナディア様、どうか早まらないで……――。

ふと意識が、途切れた。

第一話 始まりは雷鳴の如く

放課後のチャイムがアホらしく聞こえ始めたのは、いつからだっただろう。

たぶん最初からだ。

誰が決めたのか知らないが、なんだって何処の学校も同じ音なのか。そしてなぜ、『キーンコーンカーンコーン』などと簡単な擬音語で表せる音を組み合わせたのか…、今年高校生になったばかりの望月^{もちつき}虎鉄^{こてつ}には地味ながら謎だった。

(…なんて、正直どうでもいい疑問なんだけど)

虎鉄は、そんなことを考えていることすらバカらしくなって、考えることを放棄した。

なら何故そんなことを考えていたのかというのも、ついさつき放課後のチャイムが鳴ったからであって、特に意味はない。ホームルームがやけに長かったので、なんとなく考えてしまったのだ。

「えー、では先生の話はこれでおしまい。各自気をつけて帰りなさい」

担任の長い話が終わると、日直が号令をかける。
抗う理由もないので、虎鉄は日直の号令に従い、それでホームルームは終わった。

＊・＊・＊・＊

——放課後。

虎鉄が帰りの仕度したくをしていると、隣のクラスにいる幼馴染が虎鉄のもとまでやってきた。

「おうつ 虎鉄！ 帰ろうぜ」

身長は軽く180cm超えて、体格も細いながらがっちりとした青年——嶋しま 薫かおるは、虎鉄の数少ない友人の一人だ。
基本的に顔もよく、性格も明るいので男女ともに人気が高い。虎鉄とは全く正反対の男である。

「あれ、嶋。今日部活あるんじゃないの？」

「んー…サボリ！」

「ふーん、あつそ」

「おいおい、それだけかよ！ 普通さー、友達なら注意するとかしねえ？」

「知らないよ。嶋の評判が落ちるだけだし。…ていうか、注意したつて出る気ないんでしょ？ どうせ」

「いや、まあそうなんだけどよ…。相変わらず顔に似合わずドライ

「だなー、お前は」

「僕はもともとこういう性格なんだよ。ほっといて」

虎鉄がそっけなく返すと、嶋はひょいっと肩をすくめた。いかにもわざとらしい事この上ない。

（顔が選べるなら苦労しないじゃないか）

身長は170cmとあるものの、虎鉄は童顔だった。

通常よりもやや大きめの瞳は常にだるそうに細められ、童顔のわりに大人びて見える。栗色の髪が、虎鉄をより子供っぽく見せているようだが、本人は別段気にしているわけでもないらしい。実は虎鉄に友達が少ないのも、この童顔に理由があった。

嶋が言うように、虎鉄は顔が可愛いわりに性格がキツイ。

そのマイナスギャップのせいで、みんなは虎鉄に近寄らなくなった。最近では「アイツは人を見下すくせがある」と、なんか悪人扱いである。

別に見下した憶えはないんだけどな……。

「虎鉄？どうしたんだよ。早く帰ろうぜ？」

訝しげに声をかけてきた嶋の声に、虎鉄は今さっき自分が物思いにふけていたのだと気づかされる。

別に気にしているわけではないのだが、回りから白い目で見られていい気になるやつなんているわけがない。いたらそれこそ変態だ。

「あ、ああ…今行くよ」

「?どうした、腹でも痛いのか?」

「……その安直な発想は、やっぱりお前が単細胞生物だから?そうなんだろう?そうとしか思えない……」

「な、なんだよ急に。悪かったな!どーせ俺はバカだよ」

「知ってるよ。今更再申告とかいらない」

「お前が振ってきたんだろうが!」

「うるさいな…、ただでさえ声大きいんだから喚^{わめ}かないでよ」

「喚いてねえ!」

「あー…、うるさい」

二人の会話を聞いていると、まるで体（容姿）と中身（性格）が入れ違って生まれてきたかのようだ。

クラスメイトも、この二人のことは不思議なものを見るような目によく観察している。まったくもっていい迷惑だ。

だいたい。

嶋も嶋で、随分と物好きなヤツだ、と虎鉄は思う。学校中の皆に嫌われている虎鉄とつるみたいなんて思うヤツは、恐らくこの嶋くらいなもんだ。

（幼馴染だからとか…、そーゆうんじゃないんだよな……）

無理に一緒にいるんじゃないと分かるからこそ、虎鉄は嶋といえることに居心地の良さを感じていた。……虎鉄の性格上、そんなこと絶対に言ったりなどしないが。

＊・＊・＊・＊

とある山道に、光が落ちた。稲妻が地上に突き刺さったかのような衝撃だ。

しかし、その衝撃に気づく者は誰一人としていなかった。すぐ近くに住んでいる住民さえ、気がつかない。それは不思議な光景だった。

「ここが救世主様のいる……………」

光の中には、年若い男が佇たたずんでいた。現代では珍しく、その男の髪は腰よりも長い。

そして、どこか異国風の顔立ちをしていて美しい青年だった。衣装からしても、到底日本人とは思えない。

「早く見つけなければ……、私たちの救世主様を」

青年はけたたましい光の中で濁った日本の空を見上げ、ぽつりと呟いた。

・・*・*

嶋と別れ、虎鉄は家に帰るための山道を登っていた。

虎鉄の家は山の麓に建てられており、家に着くためには多少なりとも山を登る必要があった。

疲れているときには、地獄のように思える道のみである。

（まったく、なんでよりによってこんな所に家なんか建てたんだ……）

そう愚痴るのは、もはや毎日のこと。

朝は下りだからまだいいとして、帰りは疲れているというのに、まさかの上り坂だ。両親の気が知れない……。

と、まさにその時だった。

「うわっ……!？」

目を覆いたくなるほどの強い光が、虎鉄の家がある辺りで弾けたのだ。

隕石でも落ちたというのか。

「な、なんだあ…？」

我ながら情けない声が出た。

虎鉄は、しばらく呆然とした様子で光の弾けた方角を眺めていた。落ちた光は、時間が経つとだんだんと薄れていき、虎鉄が我に返る頃にはすっかり光を収め、まるで何事もなかったかのようにまわりの風景も元に戻っていた。

（あの光…、家のほうに落ちなかったか？）

ふと、そんなことを思い、虎鉄は青ざめる。もし自分の家に落ちていたとすれば、きつとただ事じゃ済まないだろう。いや、ただ事で済めばいいほうかも知れない。

（…家壊れてたらどーしよー）

虎鉄は光の落ちた方へと走り、駆け寄った。そこに、虎鉄の家は…
…なかった。

崩壊してとか、倒壊してとかの意味での『ない』ではなく、本当になくなっていたのだ。虎鉄の家自体が、そこ一面のモノ全てが…無と化していた。そこだけ、何もかもが消されていた。

「えー…、嘘でしょ？」

虎鉄が開いた口も塞がらない様子で呟くと、青白い光が再び激しく発光した。今度は長距離に広がる発光ではなく、その場で輝くもの

だった。

「っ…!？」

あまりの光の強さに、虎鉄は腕をかざして思い切り目を瞑った。
急にやめてくれよな、目がつぶれるかと思った。なんて、呑気なこ
とを口走りそうになったのは、多分現実味を感じられないからだろ
う。

きつとこれは夢だ。夢に決まってる。ちょっと現実に近い夢を見て
るだけだ。

若干の現実逃避を試みるも、この夢はいつもより何やらリアルなも
ので、どうも夢とは思えなかった。

光もだいぶ収まってきた所でゆっくりと目を開けば、風景はだいぶ
変わり果てているものの、見慣れた緑の森。夢にしては随分と忠実
に再現されている。

(ごく丁寧な夢だなあ…)

と虎鉄が呟けば、

——キユイイイイイイ……

と不気味な音を響かせ、光が薄く細く消えていく。

ふと、人らしき影が虎鉄の瞳に映った。

いや、まさか。と頭を振ったが、視力2.0の虎鉄が人を見間違え
るはずもない。あれは…、あそこにいるのは紛れもない、人間だ。
しかもどうやら男性であるらしい。体格や慎重からいって間違いな

い。

男は、腰まである長い髪を流し、遙か上空を眺めている。光が完全に消え失せると、男は空から視線を外した。

なんだか雰囲気のある男だ（… いろんな意味で）。しかも怪しい。ここは一旦逃げて、警察を呼んできたほうがいいかもしれない。

「… 誰か、いるのか？」

シンとした森の中で、その男の声は波打つように響いた。声からして、多分まだ若い。

まさか気づかれるとは思いもしなかった虎鉄は、驚き一歩後ずさる。その拍子に、近くに落ちていたらしい小枝を、うっかり『ペキッ』とへし折ってしまった。

（しまった…！！）

男は虎鉄の方に振り返る。

驚いたことに、その男はとてもきれいな顔立ちをしていた。年も若く、20代であることは間違いない。

虎鉄が顔を強張らせて男を凝視していると、男は警戒の眼差まなざしから、突然。目を大きく見開き、男の目には歓喜が浮かび煌めいた。おまけに涙のようなモノまでその目に溜めているのだから、虎鉄が驚くのも無理はない。

そして年若い青年は虎鉄に向かってこう呟いたのだ。

「ああ、救世主様……」

と。

第二話 人生何があるかわからない

虎鉄は目の前の男の言葉に首を傾げた。
今、アイツは『救世主様』と言ったか？

「ああ、救世主様……」

……どうやら聞き間違いではないらしい。

何度も救世主様と呟き涙腺を緩める男に、虎鉄はギョツと目を見開いた。

つつーと頬を伝う涙のせいで、せつかくの美形が台無しである。
大の男が顔をぐちゃぐちゃに歪めて泣く様というのも、考えものだな。うん。なんせ元がいいだけに、不細工が惨めに泣くよりひどいものがあつた。

「ああああああ、ご、ごんなにば早く救世主様が見つがるなんてええ！ああ、神はばれらをお見捨てにはならなかったということかーっ！！」

「うわあああつ、その顔でこっちに来るなよ！まずその顔を何とかしてくれ、ホラっ」

両手を広げて駆け寄ってきた男に、虎鉄は遠慮のない言葉と、制服のポケットに押し込んであつたハンカチを放り投げた。虎鉄の投げ

たハンカチを上手い具合に受け取った男は、「かたじけない」とそのハンカチで顔を拭う。

それは、サラリーマンが居酒屋などで出てきた濡れタオルで丁度顔を拭うアレとよく似ていた。要は豪快なのである。顔に似合わず、オヤジくさい…。

「あのさ…、まず聞きたいんだけど。僕の家、どこにやった？」

改めて口にすると、やはりおかしい質問だった。だが、当の虎鉄はいたって真剣である。それがまたおかしく思えて、虎鉄はちよつとだけ顔をしかめた。

虎鉄の問いに男はあっさりと答える。

「あ、消滅しました」

「あ、そう。じゃあ、ちゃんと戻しておいてね」

「申し訳ないのですが、私の力では戻すことは不可能です」

「そうなの？じゃあ仕方ないか」

……………ん？

と首を傾げたのは、虎鉄ではなく男の方だった。ありえない事を言われたはずなのに、けろつとしている虎鉄を不思議に思ったのだらう。

「あの…怒らないのですか？」

逆に男の方が聞いてしまう。

虎鉄もまた、平然と言ったものである。

「え？怒ってないわけじゃない」

ますます分からなくなる男である。

普通一般的に、『怒る』という動詞は人間に当てはめると、大声で怒鳴って怒りを示したり、それでなくても、にじみ出る何かがあるはずだ。

それが虎鉄に限っては全く感じられない。

「では、あの…怒鳴ったりしていただけると大変ありがたいのですが」

「は？……え、もしかして君そういう趣味の人？」

「違います！そうじゃなくて、そうしていただけると分かりやすいな、って意味で」

「分かってるよ、うるさいな。ちょっとからかっただけじゃん。こっちは家消されたんだからこれくらいいいでしょ」

「……………」

男の拳が一瞬強く握られた。言うまでもなく、ちょっとした『怒り』の表現である。

まあ、そんな事は置いておくとして、今解決しなければならぬ問題は『家が消滅』『コイツ誰？』『雨降りそう』の3つ。さて、まずはどれから片付けようか。

「…雨降りそうだね」

どうやら虎鉄はまず『雨降りそう』を片付けたいらしかった。

「そうですね。あ、ちょっと待ってくださいね」

そして虎鉄の会話チヨイスに何の疑問も持たなかった男は、虎鉄に一言断ると何やら不思議な動きを見せる。

近いものでいうと、アニメとかでよくある例の決めポーズみたいなアレだ。

しかも妙に堂が入っていて、まるでいつもその動きをしているかのような、そんな印象を受けた。

何してんだ、この人。

まさかこの男、ただのコスプレマニアか何かでこんな格好をしているだけなんじゃ…。

だとしたらあの髪はウィッグで、あの瞳の色はカラーコンタクトでも入れているというのか？

それにしては随分とリアリティがある。

あの薄紫色の髪と、翡翠の瞳はこの距離から見る限り本物であるように見える。

なんというか、その人に馴染んでいたのだ。昔からその色だったかのようなしっとり感に虎鉄は首を傾げた。

では、やはり本物なのだろうか？

そう考えたほうが自分の中で納得できることに、虎鉄は心底驚いた。明らかに妖しさが充満しているこの男のこの姿が、明らかに1年やそこいらの年数で身につけた代物ではないと直感的に感じたのだ。

「…ねえ、何か頑張ってるトコ悪いんだけどさ。何やってんの？」

「魔方陣を呼び出している所です」

「は？魔方陣？呼び出す？……何で？」

オウムのように男の言葉を繰り返していた虎鉄の『何で？』という言葉に、男は面食らったようだった。

とことん感性のずれたお人だ、と男は半ば感嘆にも似たため息をこぼす。

こういう場合、普通の人間ならまず『魔方陣』について馬鹿にするなり、興味を持つなりするはずだ。だがしかし、虎鉄はその全てをすっ飛ばして魔法陣を呼び出すことについてのみ『何で？』と聞いてきた。

…なるほど。救世主様に選ばれるだけあって面白い感性を持っている。

男の口元にほっそりと笑みが浮かんだ。

「なに、簡単なことですよ。今からあなた様は、この魔方陣でわが国『邪馬台国』へと転送されるのです」

「……ごめん、転送とかその前に国の名前から突っ込んでもいい？何で『邪馬台国』！？それってこっちの世界で存在した歴史上の

国だよ。何、もしかしてこれから僕過去に飛ばされるの!？」

「あ、いいえ。そうですね、この世界で言うところの異世界といったほうが近いと思います」

「だよな?だってどう見たって君の格好『邪馬台国』時代の人の服装じゃないし。第一、歴代の日本人に紫の髪と緑の目を持つ者はいない!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8344k/>

神風 - K A M I K A Z E -

2011年11月16日11時05分発行